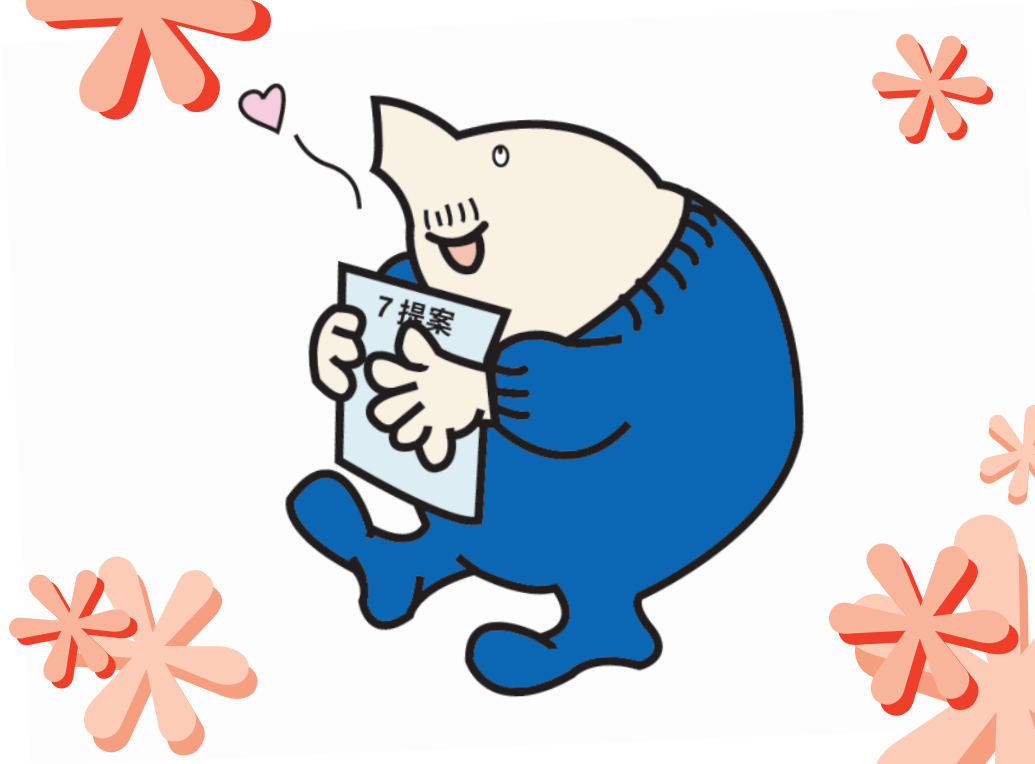
ISBN978-4-86293-063-7

ティップス先生からの7つの提案

大学院生編



名古屋大学高等教育研究センター

ティップス先生からの7つの提案とは

本冊子は、名古屋大学高等教育研究センターがよりよい教育を実現するための具体的方法をまとめた『ティップス先生からの7つの提案』の6番目の冊子です。これまでに、教員編、IT活用授業編、学生編、大学編、教務学生担当職員編の5冊子を発表し、教職員、学生、大学組織がそれぞれの立場から教育の質向上のために何を実行したらよいのかを提案してきました。

6番目にあたる本冊子には、大学院の学生であるみなさんがよりよい学習を実現できるような提案と具体的なアイディアを掲載しました。学内外におけるさまざま調査を通じて収集した大学院生の優れた実践例をこれまでの『ティップス先生からの7つの提案』の枠組みに基づいて整理し、簡潔な表現にまとめて提供しています。

大学院で「学習する」という言葉遣いには違和感を覚える人もいるでしょう。実際に、大学院生のほとんどは自ら率先して研究を行い、知的成果を出すことを求められています。この冊子にも研究活動を進めるうえで有効なアイディアを数多く収録しました。ただし大学院に在籍する意義は、新たな知識を生み出すこと、その手法を会得することにとどまりません。生み出された知識はどのように伝えられ用いられるのか、そのためにはどのような環境や仕組みが望まれるのか――知識生産を核とする広がりのある世界に目を向け、よりよい状況を作り上げていく能力を身に付けることは、大学院ならではのものといえます。専門家として自立するための訓練といってもよいでしょう。このような大学院における学習には、自らの専門的能力を将来どのように生かしていくのかというキャリア形成の観点も含まれます。

この冊子は次のような人に読んでもらいたいと思って作りました。大学院に進学はしたものの、どのように学習を始めたらよいかわからない人。大学院における学習もしくは生活が事前の期待や予想と違ってとまどっている人。大

学院生としての日々が充実してきてもっと楽しみたくなった人。ここに収められているアイディアを取り入れることで、学習の成果や今後のキャリアをより豊かにできるように考えました。

この冊子のねらいは、優れた実践と知恵を広く共有するための枠組みを提供することにあります。ですから、この冊子に挙げている項目は、みなさんの学習の状況を評価するためのものではなく、ひとりひとりの大学院生が日々の実践を少しずつ豊かにするための素材です。項目の中には、残念ながらすぐには実現できないものもあるかもしれません。その場合でも、どのようにしたら実現できるのかという考察や議論、さらには具体的な取り組みにつなげてもらえたらと思っています。

本冊子の制作にあたっては、海外の事例も参考にしながら、日本の大学院の状況に即するよう心がけました。名古屋大学の大学院に在籍する学生の協力を得て多数の実践例を集め、一緒に検討を行ったのもそのためです。さらに、名古屋大学教員からも数々のご助言をいただいています。

日本の大学院教育はいま変革の時を迎えていると言われ、課程修了後のキャリアの築き方も多様になってきています。本冊子が、皆さんの大学院における実り豊かな学習とその後の活躍の一助となれば幸いです。

※　ティップス先生って誰？

高等教育研究センターの各種刊行物で活躍するキャラクターがティップス先生です。授業をよくしようと試行錯誤する若手教員という設定で 2000 年に初登場しました。

ティップス先生からの7つの提案の使い方

この冊子は、以下のような使い方を想定しています。

1. 7つの提案は、覚えやすい簡潔な文章からなっています。みなさんが日頃気をつけていること、努力していることを整理して、体系化するための枠組みとして活用できます。
2. 49個のアイディアのなかには、自分では実践したことのないような項目も含まれているでしょう。このなかで取り入れてみたいものがあったら、ぜひ実践してみてください。すべてを実行しなければと焦る必要はありません。できそうなところ、関心のあるところから始めてください。
3. この冊子に含まれているアイディア以外にも、自分はこんなことをやっている！ということがあるかもしれません。それを仲間や後輩に伝えてみませんか。あなたの学習のアイディアや提案を高等教育研究センターまでお知らせください。今後の改訂の参考にいたします。

提 案 1

教職員と接する機会を充実させる

研究活動を通じた学習のペースをつくるには、指導教員をはじめ研究室・ゼミのスタッフと過ごす時間を内容の濃いものにすることが大切です。また、研究室・ゼミ外の教職員と接する機会を日頃から持つようにしましょう。研究室・ゼミにおける活動を客観的にとらえ、研究構想や将来のキャリアなどをさらに多角的に検討することができるようになります。

- 教員とは定期的に面談を予約する
- 指導教員のスケジュールやコンタクト方法を把握しておく
- 面談前に相談すべき事項を練り上げる
- ライティング支援、インターンシップ、留学相談など、大学院生が利用できる学内各種サービスについて情報を集める
- 教職員と交流できるイベントに積極的に参加する
- 自身の研究・キャリア上の関心を研究室・ゼミ内外の教職員に伝える
- 学習や大学院生活に困ったときは、早めに指導教員や周囲の教職員に SOS を出す

提 案 2

他の大学院生と協力して学習する

大学院では、研究室・ゼミにおける生活を充実させ、さらにそれらの枠を越えた学生間の交流も生み出していきましょう。名古屋大学には、先輩、同輩、後輩にあたる大学院生が数多くいます。あなたの周りの大学院生とは、目標を共有しあう仲間どうしであり、また相互に刺激を与えながら高めあえる間柄でもあるのです。

- 自分の方法や結論に固執しすぎず、仲間のコメントに耳を傾ける
- 学会発表の前に仲間と一緒に内容検討や発表練習の機会をもつ
- 執筆したものや講演資料を仲間内で交換してコメントをやりとりする
- 研究室の環境整備や季節行事などに積極的に企画参加する
- 自主ゼミやオンライン・ディスカッションボードなどの場を運営する
- 他の研究室・ゼミ、他の研究科、他の大学など、幅広い大学院生との交流を意識的に行う
- 自身の経験や知識を踏まえて、仲間の学習をさまざまに支援する

提 案 3

主体的に学習を進める

大学院では主に、研究とその周辺の活動を行うなかで学習を進めます。主体的に活動を進める能力は、大学院における学習対象の1つなのです。同時に、種々の知識・技能を身に付けて自身のキャリアを拓くためにも、主体性は不可欠です。だからといって独りきりで何もかも行うわけではありません。協力や支援の輪のなかで、主体性を伸ばしていくことができます。

- 研究やキャリア形成の方針について指導教員等に自分の意見を伝える
- 指導教員との面談で明らかになった課題に、次の面談までの間に取り組む
- 指導教員や仲間からの助言をもとに、自身の考えを客観的に検討する
- 指導教員をはじめとする専門家たちがどのような知識や技能を駆使しているのかを把握する
- 学会や研究会で成果発表を行い、活発に議論する
- 積極的に質問をするなどして、他者との交流や議論を深める
- 専門分野においてどのようにオリジナリティが認められるかを理解する

提 案 4

学習の進み具合をふりかえる

大学院を修了した人たちの多くが、大学院時代は長いようであっという間だったと回顧しています。目の前の課題に追いかけられることなく、在学期間すべてを見渡すような視点を常に意識しましょう。学習の計画をしっかり作ることはもちろん大切ですが、ふりかえりと柔軟な見直しこそがステップアップをもたらします。

- 考えたことや議論した内容を小まめにノートにとる習慣をつける
- 面談やゼミの前に検討項目リストや論点メモを作り、当日の記録とともに事後にファイルに綴じる
- 活動を振り返る時間を定期的に持ち、目標やスケジュールを確認修正する
- 研究成果を出すことだけでなく、専門家としての知識や技能の向上を意識する
- 活動ノート等を定期的に読み返し、活動の方針や方向を再検討する
- 目標の達成状況に加えて、自身の成長過程やそのなかで得られたスキルなどを確認する
- 後輩への指導や助言を通じて、自身の知識や技能を確認する

提 案 5

学習に要する時間を大切にする

大学院生になると学習に要する時間の使い方を自分で決める場面が増えます。これは、将来専門家として自立し、忙しい中でも種々の仕事をこなしていけるようになるための大事な訓練です。ゴールに向けて必要な行動を順序だてる、複数の要素に優先順位をつけるなど、日々意識して過ごしてみましょう。同時に、他者の時間への気配りも心がけてください。

- 分析手法や原理の理解、語学、文献の検索と記録、プレゼンテーションなど、学習に必要な技能を早い段階で身に付ける
- さまざまな活動要素がバランスよく配分された日単位や週単位の生活リズムを作る
- 調査、実験、論文執筆など、ひとつひとつの作業に必要な労力と時間をあらかじめ見積もる
- 自分がいつ行動するか、不測の事態も見込んで予定を組む
- 深く考える時間、広い視野で考える時間を意識して確保する
- 研究室やゼミなどのグループにおいて、学習に必要な役割分担を進んで引き受ける
- アルバイトをする必要があるなら、研究内容や学問分野に関連するものを選んだり、どのように将来に役立てられるかを考えたりする

提 案 6

意欲的な目標に挑戦する

学位取得は当面の目標ではあっても、それだけが大学院で学ぶ意義ではありません。学位を取ったのちに専門家として活躍し、人生をより豊かなものにするために、今できることはたくさんあります。人的ネットワークをつくり、能力を高める機会を積極的に生かし、専門分野に関わる倫理的・社会的な問題についての感度を高めるなど、活動の幅と深さを広げてみましょう。

- 専門知識を生かせるような仕事や活動の機会を見つけ、積極的に取り組む
- 研究助成、フェローシップ、学会論文賞などに申請応募する
- 定期的に種々の学術雑誌を読むなどして、学問分野の動向や自身の研究の位置づけに注目する
- 若手研究者や大学院生の活動グループや学会セッションを組織する
- OB・OG に仕事の話を聞いたり、キャリアセミナーに参加したりする
- 海外も含め、学外の高度な研究施設の利用、研究対象とする現場や現物の視察、関連する組織の人々との交流などを積極的に行う
- 専門家の社会における役割や責任について、周囲の人々と意見交換する

提 案 7

異なる考え方や背景を尊重する

学問分野はいずれも、独自の価値観や知の生成および確定の方法などからなる文化を持っています。多様な文化を大切にしてこそ、大学は発展してこられたのです。ぜひ、自身が属する文化をよく知り、広い視野をもって専門性を生かすことを追求してください。その際には、異なる学問分野や、学外のさまざまなグループがもつ異なる文化への理解が前提となります。

- 学問分野に特有の文化、価値、方法論、規準などを理解する
- 教員や周囲の学生の学術や研究に対する姿勢や工夫に学ぶ
- 多様な視点に触れて、広い視野で物事をみることを学ぶ
- 専門分野外であっても、学術誌を読んでみたり、講義や研究会などに出席したりする
- 異分野融合の成功事例などを通じて、学問分野による研究アプローチや価値観の違いとその相乗効果に目を向ける
- 企業、行政、市民団体など、学外のセクターとの交流をはかる
- 専門家集団の一員として社会貢献、地域貢献の活動に取り組む

お知らせ

1. 本冊子に収録できなかったアイディアや他の分冊の内容を知りたい人のためにホームページを作成しました。[http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/]
2. この冊子を読んだ感想、改善案、本冊子に含まれていない重要なアイディアなどのコメントをぜひお寄せください。[連絡先：info@cshe.nagoya-u.ac.jp]

本冊子作成のために参考にした主な文献

クラーク, B.（潮木守一監訳）(1999)『大学院教育の研究』東信堂.

酒井邦嘉(2006)『科学者という仕事　独創性はどのように生まれるか』中央公論新社.

高木仁三郎(1999)『市民科学者として生きる』岩波書店.

中井俊樹・齋藤芳子（2007）「大学教育の質を総合的に向上させる研修教材の評価」『メディア教育研究』第 4 巻第 1 号, pp.31-40.

夏目達也・近田政博・中井俊樹・齋藤芳子(2010)『大学教員準備講座』玉川大学出版部.

藤垣裕子(2003)『専門知と公共性　科学技術社会論の構築へ向けて』東京大学出版会.

村上陽一郎(1994)『科学者とは何か』新潮社.

文部科学省中央教育審議会(2005)『答申　新時代の大学院教育－国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて』.

Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) "Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", *AAHE Bulletin*.

Coe, E. & Keeling, C. (2000) *Setting up peer-mentoring with postgraduate research students*, SRHE.

Council of Graduate Schools [USA] (http://www.cgsnet.org/)

Cryer, P. (1997) *Handling Common Dilemmas in Supervision*, SRHE.

Cryer, P. (1998) *Developing Postgraduates' Key Skills*, SRHE.

Gough, M. & Denicolo, P. (2007) *Research Supervisors & the Skills Agenda: Leaning Needs Analysis & Personal Development Profiling*, SRHE.

Kearns, H. & Gardner, M. (2006) *The Seven Secrets of highly successful research students, Defeating Self-Sabotage - Getting your PhD finished, Time for Research - Time management for PhD students, The PhD Experience - What they didn't tell you at induction*, Flinders University.

Melbourne School of Graduate Research at the University of Melbourne [Australia]

(http://www.gradresearch.unimelb.edu.au/)
Nyquist, J. D. & Woodford B. J. (2000) *Re-envisioning the Ph. D – What Concerns Do We Have?*, CIDR and the University of Washington.
Research Careers and Diversity Unit at the Research Councils UK, (http://www.rcuk.ac.uk/rescareer/)
Vitae [UK] (http://www.vitae.ac.uk/)

本冊子の制作にご協力いただいた大学院生の方々

※氏名あいうえお順（ご所属はご協力いただいた当時のものです）

名古屋大学大学院

石井 裕貴（環境学研究科）
大隅 雄司（理学研究科）
加藤 公彦（工学研究科）
河崎 祐樹（生命農学研究科）
志村 洋介（工学研究科）
鈴木 千賀（環境学研究科）
竹橋 洋毅（環境学研究科）
坪井 雄一（国際開発研究科）
モンゴル・バヤレプレブ（工学研究科）
フレイザー真実（国際言語文化研究科）
村田 匡輝（情報科学研究科）
安井 隆雄（工学研究科）
上田 葉介（文学研究科）
會田 幹哉（国際開発研究科）
上岡 伸（教育発達科学研究科）
嶌生 有理（環境学研究科）
杉本 耕一（理学研究科）
千賀 裕子（理学研究科）
立松 裕規（工学研究科）
長谷川 哲也（教育発達科学研究科）
深沼 達也（生命農学研究科）
水川 敬章（文学研究科）
焼田 紗（経済学研究科）
吉武 久美（教育発達科学研究科）

開発スタッフ

名古屋大学高等教育研究センター

木 俣 元 一
夏 目 達 也
近 田 政 博
中 井 俊 樹
齋 藤 芳 子 （プロジェクトチーフ）
西 原 志 保

イラスト

スコーレ株式会社

ティップス先生からの7つの提案〈大学院生編〉

2011 年 3 月 10 日 第 1 版 第 1 刷

著者 名古屋大学高等教育研究センター
名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-5696
info@cshe.nagoya-u.ac.jp

印刷 株式会社ダイテックホールディング
名古屋市東区主税町4－85
TEL 052-856-6645 FAX 052-856-6646
odp@daitec.co.jp

© 名古屋大学高等教育研究センター
2011. Printed in Japan

ISBN978－4－86293－063－7